

赤野井消波堤工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書

赤野井湾遺跡

1986

滋賀県教育委員会

滋賀県文化財保護協会

序

滋賀県教育委員会では活力のある県民社会、生きがいのある生活を築くための一つとして、文化環境づくりにとりこんでいます。こうした中で文化財の保存と活用を図る施策のうち、開発に伴う埋蔵文化財の保護も重要な課題となっております。

先人の遺してくれた文化財は、現代を生きる我々のみならず子々孫々にいたる貴重な宝でもあります。このような大切な文化遺産を破壊することなく、後世に引き継いでいくためには、広く県民の方々の文化財に対する深いご理解とご協力を得なければなりません。

ここに消波堤建設に伴う事前発掘調査の成績を取りまとめましたので、ご高覧のうえ今後の埋蔵文化財保護のご理解に役立てていただければ幸いです。

最後に、発掘調査の円滑な実施にご理解とご協力を頂きました地元の方々並びに関係機関に対して厚く感謝の意を表します。

昭和61年3月

滋賀県教育委員会

教育長 南 光 雄

例　　言

1. 本書は消波堤建設事業に伴う赤野井湾遺跡の発掘調査概要報告書で、昭和60年度に発掘調査を実施したものである。
2. 本調査は水資源開発公団琵琶湖開発事業建設部からの委託により、滋賀県教育委員会を調査主体とし、財団法人滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施した。
3. 本事業の事務局は以下のとおりである。

滋賀県教育委員会文化財保護課

課長	市原 浩
課長補佐	中正 勤彦
埋蔵文化財係長	林 博通
管理係主事	山本 徳樹

財団法人滋賀県文化財保護協会

理事長	南 光雄
事務局長	江波弥太郎
埋蔵文化財課長	近藤 滋
調査一係	兼康 保明
同 技師	大沼 芳幸
総務課長	山下 弘
主事	松本 輝弘
主事	立入 裕子

4. 本書の執筆・編集は調査担当者大沼芳幸を中心として調査員桂牧の協力を得て行なった。

本書で使用した方位は磁北方位に基づき高さについては東京湾の平均海面としている。

6. 出土遺物や写真・図面については滋賀県教育委員会で保管している。
7. 今回の調査では以下の諸氏の御協力を賜った。

京都芸術短期大学浅香美津子・深見千香子・竹内淳子・仏教大学島田七生・小野睦美・小林由紀・京都産業大学中島暁子・同志社大学内田一成・関西大学野毛康広・池坊短期大学小萩美佳子。

記して御礼申し上げます。

目 次

序		
例 言		
第一 章	位置と環境.....	2
第二 章	調査経過.....	2
第三 章	調 査	
1.	層 位.....	3
2.	遺 物.....	5
第四 章	ま と め.....	6

図 版 目 次

図版1. 周辺地形およびトレンチ位置

図版2.

(上) 第1トレンチ(東より)

(下) 第2トレンチ東側土層

図版3.

(上) 第2トレンチ自然流路(東より)

(下) 第2トレンチ全景(北より)

図版4. 出土遺物 繩文式土器・木製品

図版5. 出土遺物

(上) おもて

(下) うら

図版6. 出土遺物実測図

挿 図 目 次

第1図 周辺遺跡分布図

第2図 調査地遠景

第3図 第1トレンチ

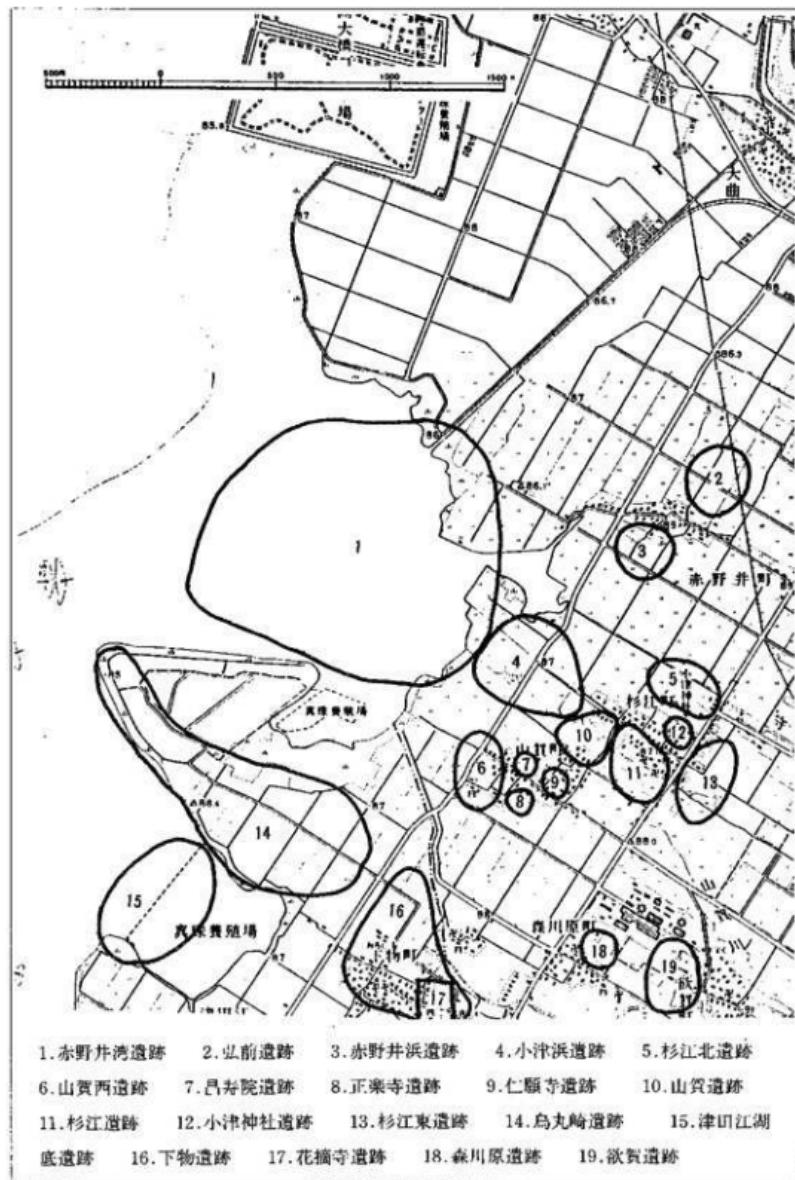
第4図 第1トレンチ土層柱状図

第5図 第2トレンチ

第6図 第2トレンチ東側土層実測図

第7図 第2トレンチ南側土層実測図

第8図 出土木製品実測図



第1図 周辺遺跡分布図

第一章 位置と環境

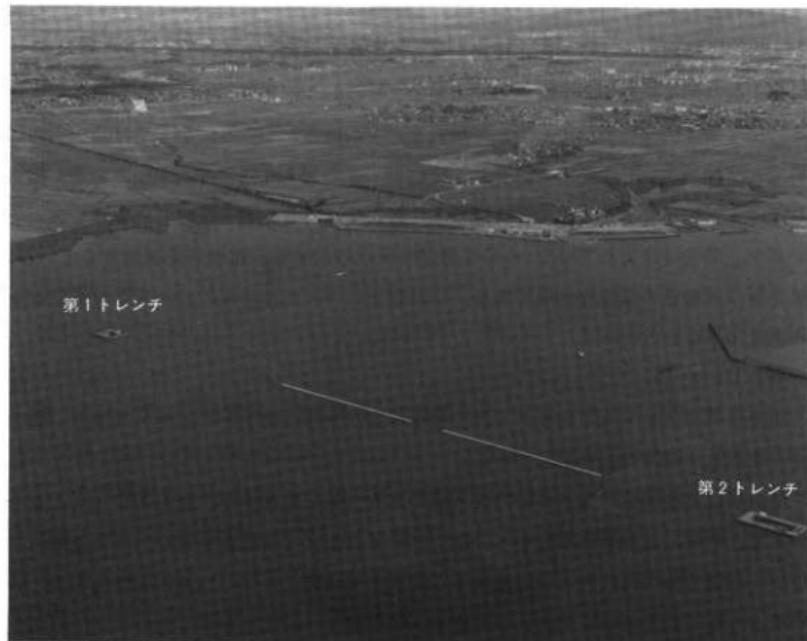
赤野井湾遺跡は、南を烏丸崎に、北を木ノ浜に囲まれた赤野井湾中に存在する。赤野井湾は、太古より幾度となくその流路を変えつつ流れ続けた野洲川によって形成された沖積平野の延長上にあり、現在も、旧野洲川の痕跡とみられる境川をはじめとし、天神川、矢島川、法龜川等の中小河川が流入している。

湖岸は宏大な葭原が広がり、発達したクリークの岸に生える柳とともに独特の景観を作り出しており、陸地からの人間の侵入を永い間阻んでいた。波比較的穏やかで、早春より水温の上る湾内は種々の魚達の産卵の場所として、また稚魚のゆりかごとしての役割を果し続けて来た。また必然的に好漁場としての役割をも持ち、湾内の隨所に大小の釣が施設され、季節ごとの湖の幸を漁獲していた。60年度に行なわれた他の湾内調査においても釣の痕跡とみられる竹杭が検出されており、古くから釣漁が盛んに行なわれていたことがうかがわれる。あたかも対岸に達するかに見えたという木ノ浜の大釣も近くに設置されていた。しかし、現在、琵琶湖総合開発の進行とともにこれらの景観は一変しつつある。

湾内の湖底地形は単調で、水深1～2mのほぼ平坦地を形成している。湖底は、場所により堆積量に差異はあるが、いずれもヘドロ状の泥土に覆われており、ダブ貝、イシ貝、タニシ等の泥地性の貝類が棲息している。しかし、遺物を包含する層位から砂地性のシジミの殻が多量に出土することを見ると赤野井湾の生成過程においては、現在とは異なる様相、景観が形成されていたのであろう。

第二章 調査経過

今回の調査は赤野井湾中に建設される消波堤建設に先立つ調査である。昭和59年度に今回の調査に先立ち工事予定地の15ヶ所に潜水による試堀調査を実施した。その結果9ヶ所において縄文時代を中心とする遺物が検出された。そのため特に遺物の出土量の多い対象地の北端にあたるNo.1ポイントおよび南端にあたるNo.15ポイントの2地



第2図 調査地遠景

区についてそれぞれ二重鋼矢板によって囲い、排水、陸化の後調査を実施した。No.1 ポイントを中心として10m×15mの第1トレンチを、No.15ポイントを中心として10m×30mの第2トレンチをそれぞれ設定した。

調査は昭和60年10月15日より12月14日までの間行われた。

第三章 調査

1. 層位

第1トレンチ

第1トレンチは消波堤工区の北端に設定した。調査は鋼矢板で二重に囲い排水の後陸化し調査を実施した。排水後のトレンチ内は約1m程のヘドロ状の泥土が堆積し作

業は難行した。

土層の堆積状況にはほとんど変化が見られず平行堆積である。

第1層は暗茶褐色のヘドロ状の泥土層で、ビニール、プラスチック等が含まれている。第2層は灰褐色の粘土層で、腐植質をわずかに含んでいる。第3層は暗灰色の砂層で、腐植質、シジミ等の貝殻を含んでいる。この層より縄文時代晩期の土器が出土している。第4層は茶褐色の粘土層で木片および腐植質、黄褐色の石灰質等を含んでいるが、遺物は含まれていない。第5層は暗灰色の砂層で、腐植質を少量含んでいる。第6層は灰褐色の細かな砂層である。これ以下については湧水のためトレンチ壁が崩れ調査出来なかった。

第2トレンチ

調査は第1トレンチと同様の方法で行なった。土層は第1トレンチとは大きく異なりやや複雑な堆積状況を示している。

第1層は暗茶褐色のヘドロ状の泥土層である。第2層は今回の調査のベースとなる層位で、明確には分層出来なかつたが、この層の上部は腐植質を含む、やや茶褐色を帯びた砂層で縄文時代の遺物を包含するが、下部に行くに従い徐々に灰褐色を呈し砂の粒子も粗くなり遺物も含まれなくなる。第3層は、第2層を切り込むように堆積している明灰色の粘土で、植物根状の腐植質を含み、上面より有頭棒が1点および土師器が1片出土している。第4層は第3層を切り込むように堆積している明灰色の粗砂層である。第5層は第2層を南側から切り込む灰褐色の砂層である。第6層は第4層および第5層を切り込み堆積している明灰色の細砂層である。第7層はトレンチ南側に見られたヘドロ層直下に薄く堆積している明灰色の粘土層である。第8層はトレンチ南側においてベースの第2層を切り込むもので第2層よりやや明るい灰褐色の砂層であるが同一層の可能性もある。第9層は第8層の上に堆積している明灰色の砂層である。第10層は第8層および第9層の上に堆積している暗灰色の粗砂層である。以下は湧水のため調査出来なかつた。

このうち第6層および、第4層、第3層を平面的に見ると北東から南西方向に流れる流路状の遺構となる。これはその堆積状況から人為的なものとは考えられず、自然流路と考えられる。さらにトレンチ南側にも平面的には確認できなかつたが落ち込みが見られることから先のものとは別方向に流れる自然流路がもう一条以上あった可能

性もある。

また遺物を包含する第2層について見ると砂の粒子が粗いこと、検出された土器片がいずれも激しく磨滅していること等から見て、上流からの流入物と考えるのが妥当であると考えられる。大極的に視るならば、調査対象地全体が大きな流路の一部と考えることが出来よう。

2. 遺 物

A) 土 器

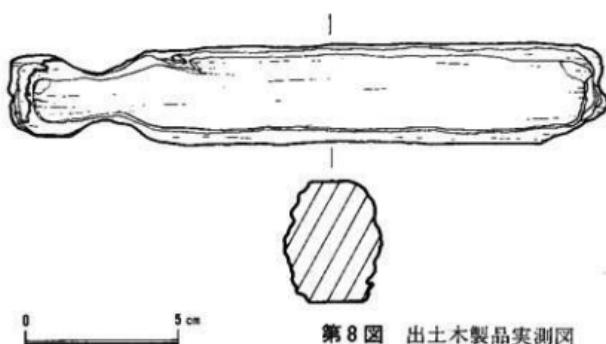
今回の調査で出土した土器はいずれも細片で一部を除きその全容を知り得るものは少ない。

第1トレンチ ①は深鉢の口縁部破片で外面上部に断面三角形の突帯を1条めぐらす。突带上に刻み等の加飾は認められない。②は外面にハケ状工具の跡と2条の刻みを入れた突帯がめぐる。いずれも縄文時代晩期の特色を持つものである。

第2トレンチ ③は深鉢の口縁部で、端部を上内方へつまみ上げ丸くおさめる。口縁部外面は刻みおよび1条の凹線により加飾される。体部外面は数状の凹線によりX画された文様を持つ。磨消縄文は観察出来ないが縄文時代後期のものであろう。④は口縁部外面に2条の凹線がめぐる。⑤も口縁部の破片であるが、表面剥落のため施文等は観察出来ない。⑥は体部破片で、外面に円形の押型文を持つ。縄文時代早期の特色を持つものである。⑦は外面に線刻文を持つものである。以下は表面が激しく剥落し、正確な観察は出来なかった。

B) 木製品

端部を両側より削り込んだ有頭棒である。一方は欠損している。腐植が激しく全容はつかみ難い。



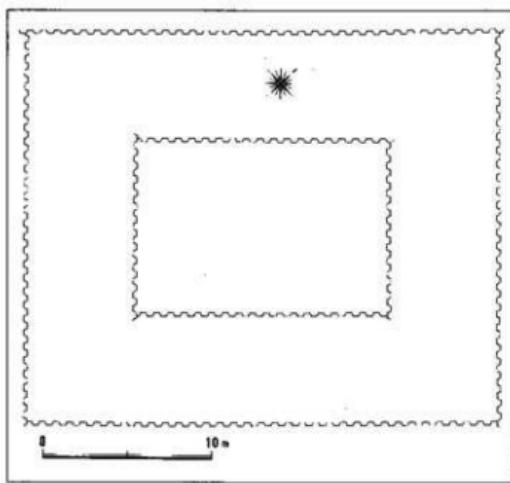
第8図 出土木製品実測図

第四章 まとめ

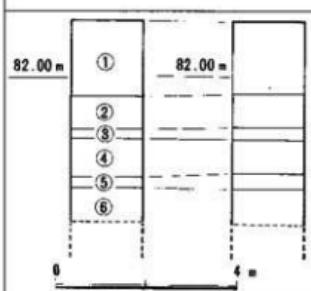
今回の調査では第1トレンチにおいては縄文時代晚期の遺物の包含する土層の存在が認められた。今回出土した遺物はいずれも縄文時代晚期のものであったが、先に行われた潜水調査および周辺の調査では異なる時代の遺物も認められていることから、この遺物包含層が同時期の単純な包含層であるとの断定はさけたい。

第2トレンチの調査においては、調査対象地があたかも巨大な流路上に位置しているような状況にあり、さらにその上に数条の自然流路が存在している。今回の調査でベースとした第2層から出土した遺物は縄文時代早期のものから縄文時代後期のものまであり年代に大きなばらつきが認められる。また今回認められた流路の年代についても出土状況や遺物の磨滅の状態等から見てそのまま遺物の年代を充てることは出来ないと考えられる。これらのことと勘案するならば、仮にこれらの流路がこの地区的陸化を示すものであったとしても、その年代および周囲の環境が人間生活可能なものであったかは現在のところいずれも明確にはし難い。

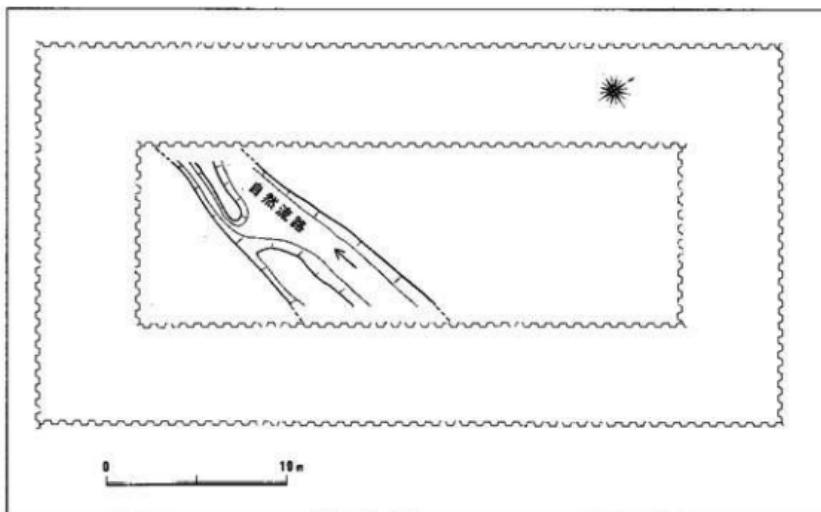
いずれにしても、今回の調査により赤野井湾南側の鳥丸崎に近接する北域の土層堆積状況がきわめて複雑な状況にあることが明らかになった。このことは今後赤野井湾生成における河川（赤野洲川等）の役割等を考える上で貴重な資料となろう。



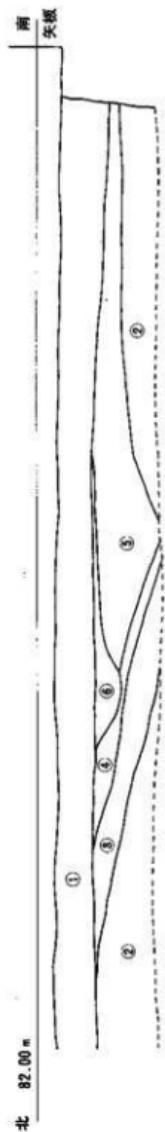
第3図 第1トレンチ



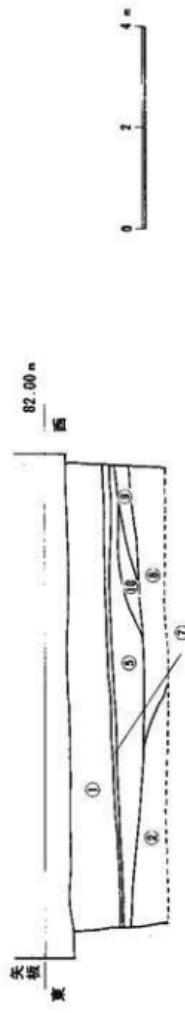
第4図 第1トレンチ土層柱状図



第5図 第2トレンチ



第6図 第2トレンチ東側土層実測図



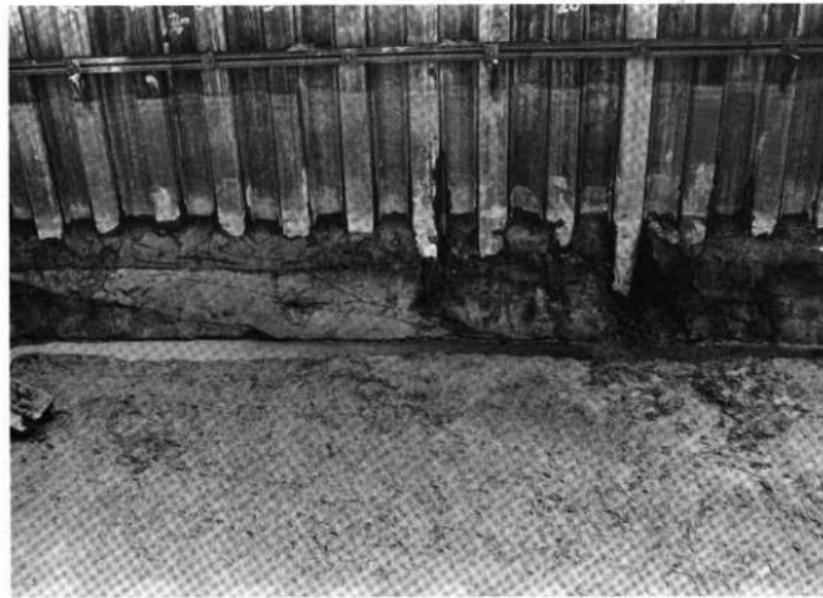
第7図 第2トレンチ南側土層実測図

図版一 周辺地形およびトレンチ位置

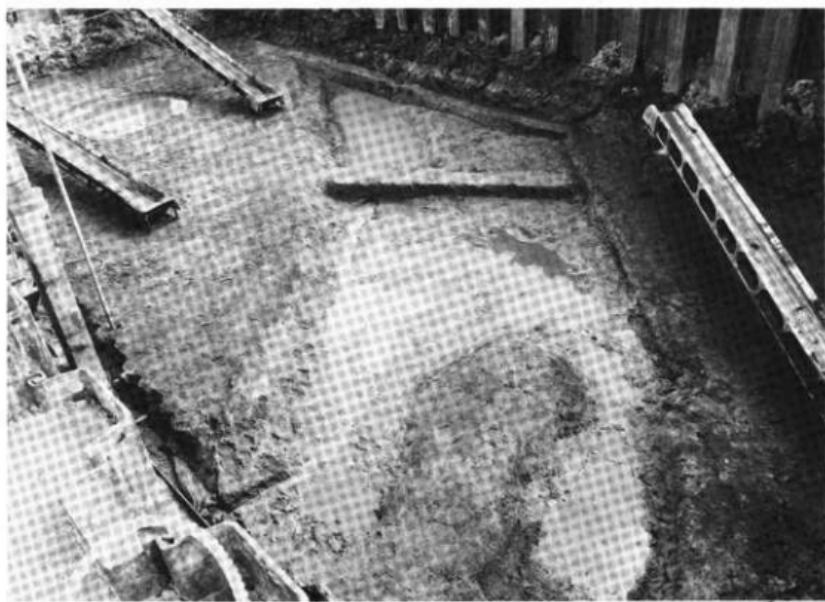




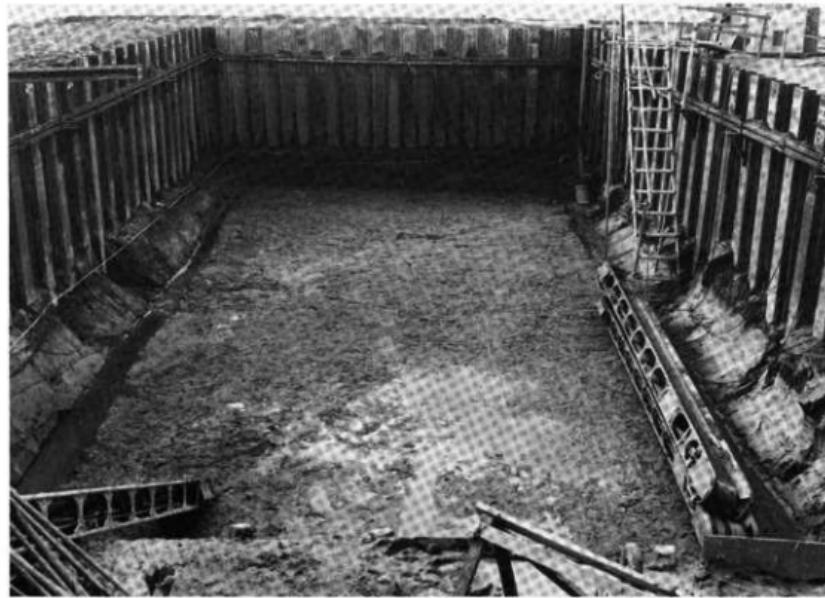
第1トレンチ（東より）



第2トレンチ 東側土層



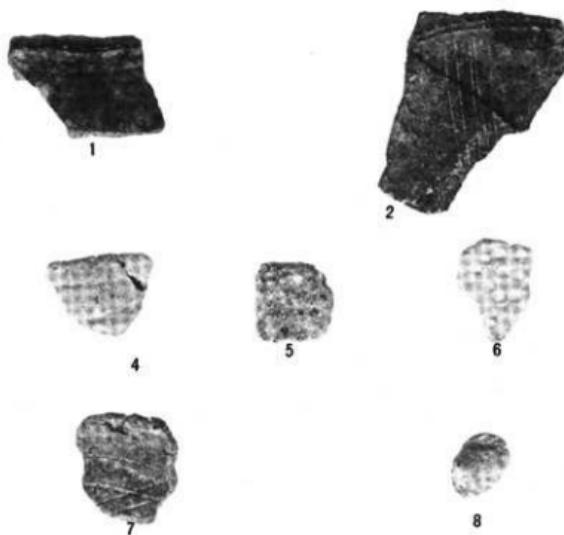
第2トレンチ 自然流路（東より）



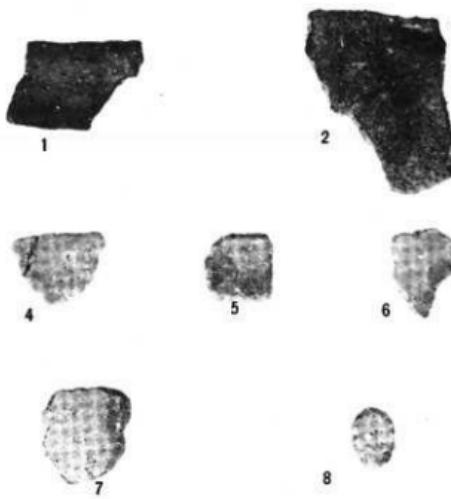
第2トレンチ 全景（北より）

図版四 出土遺物 繩文式土器 木製品



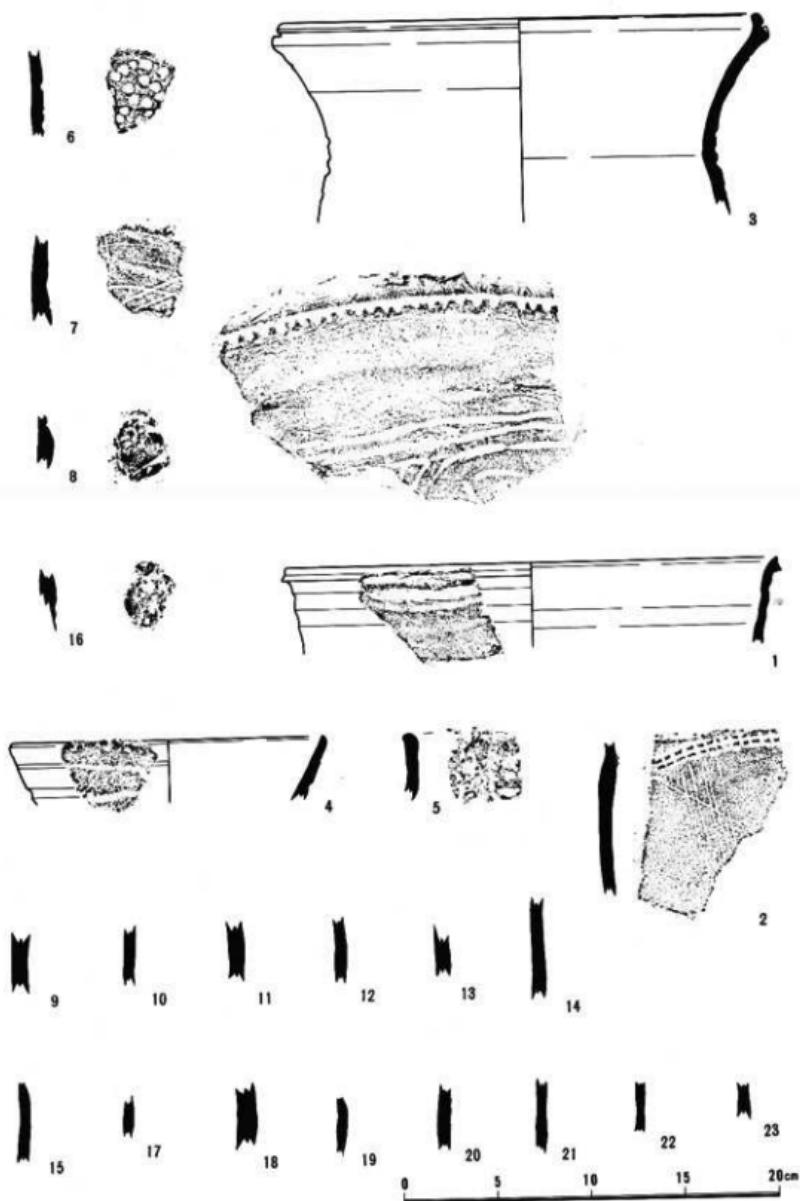


おもて



うら

図版六 出土遺物実測図



刊行年月 昭和 61 年 3 月

刊行物名 赤野井濱波堤工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書

赤野井濱遺跡

編集・発行 滋賀県教育委員会文化部文化財保護課

大津市京町四丁目1-1

電話 0775-24-1121 内線 2536

助 滋賀県文化財保護協会

大津市瀬田南大賀町 1732-2

電話 0775-48-9781

印刷・製本 明文舎印刷商事株式会社

長浜市朝日町 11-27

電話 0749-63-1441 (代)